

星あかり

泉鏡花

青空文庫

もとより何故といふ理はないので、墓石の倒れたのを引摺寄せて、二ツばかり重ねて臺にした。

其の上に乗つて、雨戸の引合せの上の方を、ガタ／＼動かして見たが、開きさうにもない。雨戸の中は、相州西鎌倉亂橋の妙長寺といふ、法華宗の寺の、本堂に隣つた八疊の、横に長い置床の附いた座敷で、向つて左手に、葛籠、革鞆などを置いた際に、山科といふ醫學生が、四六の借蚊帳を釣つて寝て居るのである。

聲を懸けて、戸を敲いて、開けておくれと言へば、何の造作はないのだけれども、止せ、と留めるのを肯かないで、墓原を夜中に徘徊するのは好心持のものだと、二ツ三ツ言争つて出た、いまのさき、内で心張棒を構へたのは、自分を閉出したのだとおも思ふから、我慢にも恃むまい。……

冷たい石塔に手を載せたり、濕臭い塔婆を掴んだり、花筒の腐水に星の映るのを覗いたり、漫歩をして居たが、藪が近く、蚊が酷いから、座敷の蚊帳が懐しくなつて、内へ入らうと思つたので、戸を開けようとすると閉出されたことに氣がついた。それから墓石に乗つて推して見たが、原より然うすれば開くであらうといふ望があつ

たのではなく、唯居るよりもと、徒らに試みたばかりなのであつた。

何にもならないで、ぼたりと力なく墓石から下りて、腕を拱き、差俯向いて、ぢつ

として立つて居ると、しつきりなしに蚊が集る。毒蟲が苦しいから、もつと樹立の少い、

廣々とした、うるさくない處をと、寺の境内に氣がついたから、歩き出して、卵

塔場の開戸から出て、本堂の前に行つた。

然まで大きくもない寺で、和尚と婆さんと二人で住む。門まで僅か三四間、左手は祠

の前を一坪ばかり花壇にして、松葉牡丹、鬼百合、夏菊など雑植の繁つた中に、

向日葵の花は高く蓮の葉の如く押被さつて、何時の間にか星は隠れた。鼠色の空は

どんよりとして、流るゝ雲も何にもない。なか／＼氣が晴々しないから、一層海端へ

行つて見ようと思つて、さて、ぶら／＼。

門の左側に、井戸が一個。飲水ではないので、極めて鹽ツ辛いが、底は浅い、屈

んでぎぶ／＼、さるぼうで汲み得らるゝ。石疊で穿下した合目には、此のあた

りに産する何とかいふ蟹。甲良が黄色で、足の赤い、小さなのが數限なく群つて動い

て居る。毎朝此の水で顔を洗ふ、一杯頭から浴びようとしたけれども、あんな蟹は、夜

中に何をするか分らぬと思つてやめた。

門を出ると、右左、二畝ばかり慰みに植ゑた青田があつて、向う正面の畦中に、琴弾松といふのがある。一昨日の晩宵の口に、其の松のうらおもてに、ちら／＼灯が見えたのを、海濱の別荘で花火を焚くのだといひ、否、狐火だともいつた。其の時は濡れたやうな眞黒な暗夜だつたから、其の灯で松の葉もすらくと透通るやうに青く見えたが、今は、恰も曇つた一面の銀泥に描いた墨繪のやうだと、熟と見ながら、敷石を踏んだが、カラリ／＼と日和下駄の音の冴えるのが耳に入つて、フと立留つた。

門外の道は、弓形に一條、ほの／＼と白く、比企ヶ谷の山から由井ヶ濱の磯際まで、斜に鶺鴒の橋を渡したやう也。

ハヤ浪の音が聞えて來た。

濱の方へ五六間進むと、土橋が一架、並の小さなのだけれども、滑川に架つたのだの、長谷の行合橋だのと、おなじ名に聞えた亂橋といふのである。

此の上で又た立停つて前途を見ながら、由井ヶ濱までは、未だ三町ばかりあると、つく／＼然う考へた。三町は蓋し遠い道ではないが、身體も精神も共に太く疲れて居たからで。

しかし其まゝ、素直に立つてるのが、餘り辛かつたから又た歩いた。

路の兩側、しぼらくのあひだ、人家が斷えては續いたが、いづれも寢靜まつて、白け

た藁屋の中に、何家も何家も人の氣勢がせぬ。

其の寂寞を破る、磴音が高いので、夜更に里人の懷疑を受けはしないかといふ

懸念から、誰も咎めはせぬのに、拔足、差足、音は立てまいと思ふほど、なほ下駄の

響が胸を打つて、耳を貫く。

何か、自分は世の中のものに、現在、慙く、悄然、夜露で重ツくるしい、白

地の浴衣の、しほたれた、細い姿で、首を垂れて、唯一人、由井ヶ濱へ通ずる砂道を

迎ることを、見られてはならぬ、知られてはならぬ、氣取られてはならぬといふやうな思

であるのに、まあ！廂も、屋根も、居酒屋の軒にかゝつた杉の葉も、百姓屋の土間に

据ゑてある粉挽白も、皆目を以て、じろじろ睨めるやうで、身の置處ないまでに、

右から、左から、路をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなつて、おどくし

て、其癖、驅け出さうとする勇氣はなく、凡そ人間の歩行に、ありツたけの遅さで、

汗になりながら、人家のある處をすり抜けて、やうく石地藏の立つ處。

ほツと息をすると、びようくと、頬に犬の吠えるのが聞えた。

一つでない、二つでもない。三頭も四頭も一齊に吠え立てるのは、丁ど前途の濱際に、また人家が七八軒、浴場、荒物屋など一廓になつて居る其あたり。彼處を通抜けねばならないと思ふと、今度は寒氣がした。我ながら、自分を怪むほどであるから、恐ろしく犬を憚つたものである。進まれもせず、引返せば再び石臼だの、松の葉だの、屋根にも廂にも睨まれる、あの、此上もない厭な思をしなければならぬの歟と、それもならず。靜と立つてると、天窗がふらく、おしつけられるやうな、しめつけられるやうな、犇々と重いものでおされるやうな、切ない、堪らない氣がして、もはや！横に倒れようかと思つた。

處へ、荷車が一臺、前方から押寄せるが如くに動いて、來たのは類被をした百姓である。

これに夢が覺めたやうになつて、少し元氣がつく。

曳いて來たは空車で、青菜も、藁も乗つて居はしなかつたが、何故か、雪の下の朝市に行くのであらうと見て取つたので、なるほど、星の消えたのも、空が淀んで居るのも、夜明に間のない所爲であらう。墓原へ出たのは十二時過、それから、あゝして、あゝして、と此處まで來た間のことを心に繰返して、大分の時間が経つたから。

と思ふ内に、車は自分の前、ものの二三間隔たる處から、左の山道の方へ曲つた。雪の下へ行くには、來て、自分と摺れ違つて後方へ通り抜けねばならないのに、と怪みながら見ると、ぼやけた色で、夜の色よりも少し白く見えた、車も、人も、山道の半あたりでツイ目のさきにあるやうな、大きな、鮮な形で、ありのまゝ衝と消えた。

今は最う、さつきから荷車が唯いつてあるいて、少しも輾轢の音の聞えなかつたことも念頭に置かないで、早く此の懊惱を洗ひ流さうと、一直線に、夜明に間もないと考へたから、人、憚らず足早に進んだ。荒物屋の軒下の薄暗い處に、斑犬が一頭、うしろ向に、長く伸びて寝て居たばかり、事なく着いたのは由井ヶ濱である。

碧水金砂、晝の趣とは違つて、靈山ヶ崎の突端と小坪の濱でおしまはした遠淺は、暗黒の色を帯び、伊豆の七島も見ゆるといふ蒼海原は、さゝ濁に濁つて、果なくおつかぶさつたやうに堆い水面は、おなじ色に空に連つて居る。浪打際は綿をば束ねたやうな白い波、波頭に泡を立てて、どうと寄せては、ぎつと、おうやうに、重々しう、翻ると、ひた／＼と押寄せるが如くに来る。これは、一秒に砂一粒、幾億萬年の後には、此の大陸を浸し盡さうとする處の水で、いまも、瞬間の後も、咄嗟のさきも、正に然なすべく働いて居るのであるが、自分は餘り大陸の一端が浪のた

めに喰く缺けつかれることの疾はやいのを、心こころ細ほそく感かんずるばかりであつた。

妙めう長ちやう寺じに寄き宿しゆくしてから三十日にちばかりになるが、先さきに來きた時じ分ぶんとは濱はまが著いちしく縮ちぢまつ

て居ゐる。町まちを離はなれてから浪なみ打うち際ぎはまで、凡およそ二百歩ほもあつた筈はずなのが、白しろ砂すなに足あしを踏ふ掛か

けたと思おもふと、早はや爪つま先さきが冷つめた浪なみのさきに觸ふれたので、晝ひる間まは鐵てつの鍋なべで煮にあ上げたやうな

砂すなが、皆みなずぶ／＼に濡ぬれて、冷ひやく、宛さ然ながら網あみの下したを、水みづが潜ひそんで寄よせ來くるやう、砂すな地ぢ

に立たつても身からだ體たいが搖ゆぎさうに思おもはれて、不ふ安あん心しんでならぬから、浪なみが襲おそふとすた／＼と

後あとへ退のき、浪なみが返かへるとすた／＼と前まへへ進すすんで、砂すなの上うへに唯ただ一人ひとりやがて星ほし一つひとつない下したに、

果はて果あ蒼そう海かいの浪なみに、あはれ果は敢かない、弱よわい、力ちからのない、身からだ體たい單ひと個とも弄あそばれて、勿は返ねかへされ

て居ゐるのだ、と心こころ着ちやくいて悚ぞつ然ぜんとした。

時ときに大おほ浪なみが、一ひとあて推おし寄よせたのに足あしを打うたれて、氣きも上うずつて蹠よろ跟げか／＼つた。手てが、

砂すな地ぢに引ひ上げてある難なん破ぱ船せんの、纜わづかに其その形かたちを留とどめて居ゐる、三十石こごう積みと見み覺おぼえのある、

其その舷なはたにか／＼つて、五寸釘ごすんくぎをヒヤ／＼と掴つかんで、また身み震ふるをした。下げ駄たはさつきから

砂すな地ぢを驅かける内うちに、いつの間まにか脱ぬいでしまつて、跣はだし足あしである。

何な故げかは知しらぬが、此この船ふねにでも乗のつて助たすからうと、片かた手てを舷なはたに添そへて、あわたゞしく

擦すり上あがらうとする、足あしが砂すなを離はなれて空くうにか／＼り、胸むねが前まへ屈かみになつて、が／＼と俯うつ向むい

た目に、船底に銀のやうな水が溜つて居るのを見た。

思はずあツといつて失望した時、轟々轟といふ波の音。山を覆したやうに大畝が來たとばかりで、——跣足で一文字に引返したが、吐息もならず——寺の門を入ると、其處まで隙間もなく追繼つた、灰汁を覆したやうな海は、自分の背から放れて去つた。

引き息で飛着いた、本堂の戸を、力まかせにがたひしと開ける、屋根の上で、ガラノといふ響、瓦が残らず飛上つて、舞立つて、亂合つて、打破れた音がしたので、はツと思ふと、目が眩んで、耳が聞えなくなつた。が、うツかりした、疲れ果てた、倒れさうな自分の體は、……夢中で、色の褪せた、天井の低い、皺だらけな蚊帳の片隅を掴んで、暗くなつた灯の影に、透かして蚊帳の裡を覗いた。

醫學生は肌脱で、うつむけに寝て、踏返した夜具の上へ、兩足を投懸けて眠つて居る。

ト枕を並べ、仰向になり、胸の上に片手を力なく、片手を投出し、足をのぼして、口を結んだ顔は、灯の片影になつて、一人すやくと寝て居るのを、……一目見ると、其は自分であつたので、天窓から水を浴びたやうに筋がしまつた。

ひたと冷い汗になつて、眼を睜き、殺されるのであらうと思ひながら、すかして蚊帳の外を見たが、墓原をさまよつて、亂橋から由井ヶ濱をうろついて死にさうになつて歸つて來た自分の姿は、立つて、蚊帳に縋つては居なかつた。

もののけはひを、夜毎の心持で考へると、まだ三時には間があつたので、最う最うあたまがおもいから、其まゝ黙つて、母上の御名を念じた。——人は慥ういふことから氣が違ふのであらう。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 巻四」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

1986（昭和61）年12月3日第3刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星あかり

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>